

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Katrina San Juan NAVALLO
論文題目	Paid to Care: The Ethnography of Body, Empathy, and Reciprocity in Care Work Among Filipinos in Japan (有償でケアする —在日フィリピン人介護職における身体・共感・互酬性の民族誌—)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本の高齢者施設で介護労働に従事するフィリピン人移民労働者が、経済連携協定を始めとする両国間の様々な仕組みによりどのように来日し、本国で取得した資格と必ずしも合致しない介護労働に、低給与で厳しい労働条件のもとで従事することによどのような意味を見出すのかを明らかにする。日本国内二ヶ所の介護施設における参与観察、および2017年4月から2019年6月までの50人のフィリピン人介護労働者へのインタビュー等による調査をもとにしている。</p> <p>本論文は8章と結論からなる。第1章序論では、研究の問いと背景や概要を提示する。日本で介護に携わるフィリピン人移民労働者について、マクロな移民政策や雇用政策の動向のなかで彼ら自身の経験を問うとともに、彼らがどのような技術や理想をもって来日し、日本で介護労働がいかに構築されるか、そこで彼らが職場で様々な関係を形成し、仕事に意味を見出していく過程をミクロな視点から検証するという論文の問いと構成を示す。第2章では、論文の理論的背景と諸概念を提示する。有償のケアやケアの倫理に関わる議論、労働としてのケア、ケアの互酬性や身体性をめぐる議論の中で本論を位置づける。第3章では、調査の方法論を示す。介護労働者が送り出されるフィリピン側の訓練施設や、日本で彼らが雇用されている近畿と九州の二ヶ所の特別養護老人ホームでの参与観察やインタビューを実施したことを、施設の概要とともに説明する。</p> <p>第4章以降は、介護労働者がフィリピンで訓練を受けた後に来日し、施設で働き始めて入居者と関わっていく時間的プロセスをそのままたどる構成となっている。第4・5章は、まずトランスナショナルな空間においてケアが労働として形成される制度的な側面について検証する。第4章では、日本の圧倒的な介護労働力不足に対応して移民、福祉、雇用をめぐる諸政策の多様な組合せから、介護労働者の来日には複数の経路があること、それらを通じて移動するフィリピン人および、長期滞在者として日本に在住するフィリピン人が同じ介護労働に従事していることを述べる。そのうえで、両国におけるケアの職業的定義の齟齬や日本の受入れシステムが、介護労働者の職業的役割や責任をめぐる理解に葛藤をもたらしていると論じる。第5章では、両国におけるケア労働をめぐる訓練と資格の相違から、フィリピンで看護師の資格を持っている場合でも来日後に介護福祉士として再訓練を受け、日本語能力においてハンディを背負い、専門的な管轄も限定されることから、</p>			

職業上の下方移動に甘んじざるをえないことを論じる。彼らは技能や資格はなくても言語能力のある長期滞在者が有利な状況で、本国で得てきた資格、地位や階層、社会的アイデンティティを剥奪され、資格に見合わない労働に従事していることを指摘する。

第6～8章は、実際の施設における、フィリピン人介護労働者をめぐる諸関係に目を転じる。第6章では、日本人職員との不平等な関係のなかで、フィリピン人労働者が日本の施設における仕事の仕方や上下関係、自らの言語能力や文化理解が不十分なために生じる軋轢にどのように対処しているかを問う。現場で求められるのは彼らの労働力であり、「人種」的な差異が日本人同僚との関係を規定していると指摘する。両国の仕事上の倫理、職業観の相違や、階層関係のなかで他国にあって疎外感を味わうフィリピン人がどのように日本で求められる介護労働を身につけながら適応していくかを論じている。

第7章では、フィリピン人労働者が日本の施設で介護労働を身につけながら、身体的要素を介して高齢入居者との間に日常的に形成する相互関係について考察し、両国におけるケアの在り方の相違を身体性という観点から検討している。彼らが身体を介した親密な相互関係を通じて自らの家族を念頭に高齢者に共感していると指摘し、有償のケア行為が身体性を介して「人種」的な差異を超える関係性の形成の可能性をもつことを指摘する。

第8章では、フィリピン人労働者がケアの職業化のもたらす限定性のなかで葛藤しながらケアの受け手との互酬的關係を築いていることを論じる。彼らは、福祉体系や介護労働の在り方も大きく異なる日本で、職業的アイデンティティを剥ぎ取られ、低賃金で困難な労働に従事し昇進の望みもなく、また移民労働者として不平等な立場に位置づけられる。それでも、日本の高齢者施設で身につける介護労働に自らのケア実践を盛り込んで、高齢者との身体性を介した親密な関係性を築く中で高齢入居者から受ける評価や、日本社会における価値づけにより自らの労働に意味を見出すと結論する。